

いるは



日本と台湾との架け橋
法人 交流協会
Interchange Association, Japan (IAJ)

住所：台北市慶城街28号 通泰商業大樓
TEL：02-2713-8000 FAX：02-2713-0705
HP：http://www.koryu.or.jp/nihongo/（日本語センター）

26

2008年4月20日発行

発行：財団法人交流協会日本語センター 編集：佐藤貴仁・劉皓盈 印刷：加斌有限公司

台湾の中学校における日本語教育

佐藤貴仁（台北事務所日本語専門家）

台湾で唯一、日本語を必修科目として開講している中学

台湾島最南端に位置する屏東県の私立美和高級中学（以下美和高中）は中等部（中学課程、以下中学）と高等部（高校課程、以下高校）からなる6年制の中等教育機関である。この美和高中は中等教育前期である中学課程において、台湾で唯一、日本語を必修科目として採用している機関であり、中学の1・2年生（と高校の1・2年生）を対象に日本語教育が行われている。同校では2002年より日本語教育が開始され、「日本語」は開講当初から必修科目となっており、現在、中学では1年生次に週2時間、2年生次に週1時間日本語が教えられている。

台湾ではこの10年来、教育部（日本の文部科学省に相当）が中等教育機関における第二外国語教育の普及に力を注いでおり、日本語学習者も着実に増加している（本誌5ページ参照）。しかし、そのほとんどが中等教育後期である高校課程を対象としており、日本語を専門として学ぶ「日本語コース（『日文組』など）」以外では、選択科目の一つとして日本語クラスが開講されるに留まっている。こうした状況の中、中学から日本語を必修で学ぶ美和高中のカリキュラムは極めて珍しいと言えるだろう。では、なぜ同校の中学が必修科目としての「日本語」の導入に踏み切ったのだろうか。同校の卒業生でもある涂順振校長は次のように述べている。

「国際社会で生き抜くためには、語学力が必要だと思います。特に英語と日本語。この二つの言語ができることによって、生徒達の将来の選択肢も広がるでしょう。だから、中学生という若いうちから、日本語を学ばせたいのです。」

このような理念の下で始められた美和高中の日本語教育だが、担当している教師はわずか1名である。同校の日本語教育を一手に引き受けているその人物を次に紹介する。

美和高中の日本語教師 張淑怡先生

2008年4月現在、約700名の生徒が美和高中で日本語を学んでいる。そのすべての授業を担当しているのが、張淑怡先生である。張先生は大学で日本語を専攻し、在学中には中等教育の「日本語」の教員免許も取得したものの、初めから日本語教師を目指していた訳ではないと言う。教師になったきっかけは、偶然、語学塾の日本語教師の求人を見つけ、教え始めたことによる。最初は単に日本語が好きだという理由で、日本語に関係する仕事をしたかったという漠然とした思いしかなかったが、教師としての仕事を続けていくうちに、教えることが好きになったと言う。

「生徒達は元々日本語が全然分からないのに、次第に話せるようになる。その成長過程を見ているのがうれしい。」と語る張先生は、語学塾や高校の兼任教師を経て、美和高中で日本語が導入された2002年より、専任教師として日本語を教えている。授業の内容を考え、そのための準備をするなど、教えることに関してはどの機

1

台湾の中学校における日本語教育



関も変わりはないが、語学塾と美和高中のような中等教育機関では、仕事の取り組み方に違いがあると言う。では、何が違うのだろうか。中学における日本語教育の現状について、さらに詳しく話を聞いた。

中学における日本語教育の現状

語学塾と中学における日本語教育には違いがあると言う張先生が指摘するのは、「学習者の意欲」と「クラスの人数」の違いである。語学塾では明確な学習目的を持った社会人が主な対象となり、クラスも少人数のため教えやすかったが、同校では日本語は必修科目であり、中には興味のない生徒にも教えなければならず、また、1クラスの人数も40名前後と多い。よって、学習者全員に目を配ることや授業内容の説明もさることながら、何より生徒達の日本語への興味を持続させることに、苦心すると言う。日本語学習にあまり意欲的ではない生徒に対しては、日本のアニメやドラマ、映画のDVD鑑賞や着物、茶道などの文化紹介を通して、興味を惹きつける工夫をしているそうだ。ほかに、映画の名前からその意味を類推したり、ドラマを見て中国語でその感想を話し合ったりすることもある。このようなことをするのは、勉強はしたくないが、日本の映像作品には興味を示す生徒が多いからである。さらに、授業中には絵カードなどを通して視覚に訴える、会話や文型練習を大量にさせるなど、生徒の集中力が途切れないようにするための工夫もしていると言う。また時には、日本の歌を教材として使うこともあるなど、生徒を飽きさせないために、常に心を砕いている様子が窺える。

しかし、日本語学習に意欲的な生徒とそうでない生徒とでは、やはり成績の差も大きく、試験はほぼ100点から0点までと、ばらつきがある。成績不良の生徒には、補習を行いたい気持ちはあるが、現在設定されている時間割には、その時間を入れ込む余地がない。また、「日本語」は受験科目ではないため、学年が上がるにつれ授業時間も少なくなり、受験年度の3年生次では開講されず、その分、受験科目の学習に時間が割かれることになる。継続を望む生徒も少なくないが、現実的な問題には抗えない。このような現状の中、中学で日本語を教えることに対し、張先生は長期的視野に立った二つの意味を見い



【左上】涂順振校長 【右上】張淑怡先生 【下】「海外児童日本体験プログラム」で、日本へ研修旅行をする予定の生徒達

だしている。一つは「日本語に興味を持つきっかけを提供すること」であり、もう一つは「生徒の将来に繋げるためのもの」である。実際、中学から他校に進学した生徒の中には、語学塾や高校の第二外国語として日本語の学習を継続する者や、中には大学の日本語学科に進学した者もいるという。また、発音や仮名などの基礎的な知識があれば、将来、再度日本語を学習する機会を得た際に、役に立つこともあるだろう。

また、財団法人博報児童教育振興会¹が実施している「世界のこども日本語ネットワーク推進事業²」の今年度における「海外児童日本体験プログラム」で、張先生の引率の下、同校の生徒5名が日本へ行くことが決まっている。この事業は複数のプログラムで構成されており、1年目は張氏が日本での教師研修に参加した。2年目である今年度は美和高中の中学生同様、自国で日本語を学習しているアジア各国の中学生と共に、日本の文化・社会体験や日本の学校訪問などを行う予定となっている。他国の生徒と共に、日本を体験するという機会もまた、彼らの将来に繋がる出来事になることだろう。

¹URL : <http://www.hakuhodo.co.jp/foundation/index.html>

²「海外教師日本研修プログラム（海外日本語授業環境整備）」「海外児童日本体験プログラム（日本と海外の児童・生徒との異文化交流）」「日本児童海外体験プログラム（日本児童・生徒の海外異文化体験）」からなる、日本語教育ネットワーク形成推進及び文化理解促進事業



「日本語教育における文法的作用を見直す」

野田尚史（大阪府立大学教授）

1.日本語教育の文法は日本語学の文法に従っているだけ

日本語の教科書、特に初級の教科書の多くは、「～てください」や「～ために」のような「文型」を順に教えていく形になっています。このような「文型」は日本語を学びたい人たちのニーズをもとに決められたのでしょうか。そうではないと思われます。ほとんどは、日本語学で研究されてきた文法をそのまま使っているだけです。

日本語学は、長い間、言語の体系や文の構造を明らかにすることを目的としてきました。そのような文法をそのまま日本語教育に持ち込んだため、日本語教育の文法は、言語の体系や文の構造を教えるだけで、コミュニケーションを考えないものになっています。

2.「書け」「見ろ」という命令形を練習する無駄

たとえば、初級の教科書には、「書け」「見ろ」のような命令形を教え、それを言う練習をさせるものがあります。そのような練習をしても、実際には命令形を言わなければならない機会はほとんどないと思われます。

命令形で「逃げろ！」とか「金を出せ！」と言われてわからないと危険だから命令形は必要だと思われるかもしれませんが、それなら、「危ない！」なども含めて、聞いてわかる練習をすればよいだけで、命令形という動詞の形を作って、すぐ言えるようにする必要はないはずです。

命令形を教えようとするのは、日本語学で研究されてきた動詞の活用形をすべて教えたいからでしょう。

3.「～たほうがいいです」を練習する危なさ

初級の教科書には、「かさを持っていったほうがいいですよ」のような文型を教え、それを言う練習をさせるものがあります。しかし、「～たほうがいいです」という表現は「あなたの知らないことを私が教えてあげる」というニュアンスが出やすいため、かなり強く、危ない表現だと言えます。

この文型は、「かさを持っていったほうがいいですか」のような質問文で使えば、危なくなく、実際に使える場面も多いと思われます。平叙文でも、「～たほうがいいかもしれませんね」のように断定を避ければ、あまり危なくありません。

「～たほうがいいですか」や「～たほうがいいかもしれませんね」より「～たほうがいいです」を中心に教えるのは、言語の体系としてはこちらが基本だからです。実際のコミュニケーションのことは考えていないということです。

4.日本語教育の文法はコミュニケーションのために

日本語を学ぶ人は、日本語の体系や構造について知りたいのではなく、「聞く」「話す」「読む」「書く」というコミュニケーション活動ができるようになりたいはずです。

コミュニケーションのためと考えると、日本語教育に必要な文法も、今までとは大きく違ってきます。

5.「よ」「ね」を練習する必要性

たとえば、今までは「を」「に」「で」のような格助詞は徹底的に練習させるのに、「ね」「よ」のような終助詞はほとんど練習させないのが普通でした。

しかし、「を」や「に」は間違っても理解してもらえますが、「ね」や「よ」は間違えると相手に不快な印象を与えることがあります。大学のゼミで「よ」をたくさん使って発表したら、先生が「そんなことは私もみんなも知っている」と怒り出したというような非母語話者の失敗談もよく聞きます。

「ね」や「よ」をほとんど教えてこなかったのは、最近まで日本語学でほとんど研究されてこなかったからです。しかし、話すコミュニケーションのためにはとても重要です。

6.メールで具体的な質問をするような練習の必要性

今までの日本語教育では、「先生のお家で夕食をごちそうになったので、お礼のはがきを書く」というような練習をすることがありました。しかし、実際にはこのようなときにはがきを書く人はほとんどいないと思われます。

このような練習の目的は、はがきを書くことではなく、「～ていただく」などの文型を使えるようにすることだけだといってもよいと思われます。

書くコミュニケーションの練習としては、たとえば、「知らない先生に研究生として受け入れてくれるかどうかを聞くメールを書く」という練習のほうが現実的です。そのときは、日本語の表現力だけでなく、どんな情報をどんな順序で書けばよいかという情報伝達技術も重要になります。

7.コミュニケーションのための日本語教育の可能性

日本語の体系や構造を教えるのではなく、日本語でコミュニケーションをする方法を教えようとするれば、今までとはまったく違う日本語教育の可能性が見えてくるはずです。

参考文献

新屋映子・姫野伴子・守屋三千代（1999）

『日本語教科書の落とし穴』アルク

野田尚史（編）（2005）

『コミュニケーションのための日本語教育文法』くろしお出版

第1回 インタビュー

馬場克樹 (交流協会台北事務所文化室室長)

今号からインタビューの連載を開始します。第1回目は、交流協会台北事務所文化室の馬場克樹室長に、業務内容や台湾の日本語教育に対する考えや台湾の印象、生活について話を聞きました。



Q:交流協会文化室の仕事とは何か、具体的に教えてください。

一言で言えば、日台文化交流の橋渡し役と考えています。具体的には、奨学金留学制度や高校生招聘等に代表される「青少年交流事業」、研究者・専門家・文化人・芸術家等の招聘を中心とする「学術文化交流事業」、そして、日本語センターの事業として実施している「日本語教育支援事業」が文化室の業務の三本柱です。それに、日本語教育機関調査、閲覧室やウェブサイトの運営といった調査・広報を中心とする「情報交流事業」が加わります。

Q:「日本語教育支援事業」とは何ですか。

台北事務所文化室の内部に併設される形で、日本語センターが置かれていて、そこで台湾の日本語教育に関わる事業を行っています。具体的な事業内容の一例として、研修会・講演会のオーガナイズ等が挙げられます。また、事業を進める日本語専門家は台北・高雄の両事務所に合わせて5名おり、それぞれ「レクチャー」「コーディネーター」「アドバイザー」の三つの顔を持っています。

Q:交流協会として、どのような形で台湾の日本語教育に貢献できると思いますか。

中等教育レベルを中心とした日本語教師の研修を行うことや、社会貢献の一つとして、公務員に対する日本語研修も行っています。また、日本語教育関連情報のプラットフォームとしての情報の収集と発信、そして日本語学習者に対するエンカレッジメントなども考えられます。

Q:台湾は世界でも有数の日本語教育が盛んな場所であり、もはや交流協会の支援など必要ないのでは？という意見もありますが、それについてどうお考えでしょうか。

それぞれの学校や学会は相当レベルが高いという印象を受けています。ただし、学校間や地域間をつなぐ横のネットワークは、これからもう少し絆を太くする必要があると感じています。交流協会では、まさにそうした組織同士を繋ぐ「橋渡し役」、あるいは、関係を構築するための「プラットフォーム」となるような役割が期待され

ていると思います。また今後は、個々の組織の特質を生かしながら、当協会と各組織とが事業協力・共催等の形で連携を深め、双方にとってメリットがあり、より多面的に、より大きな力となって日本語教育が支援できるようになることをイメージしています。また、これまでの支援の対象は、事務所のある台北、高雄を中心に日本語教育関係機関・学習者数の多い西海岸に集中していましたが、地域的なバランスを取ることも考えて、今年からは東海岸でも出張講演・研修会の実施を計画しています。

Q:台湾の印象はいかがですか。

月並みですが、台湾の最も素晴らしいところは、人情味だと思います。「三丁目の夕日」¹の世界が残っていて、いい意味で人に対する関心が高いですね。私も多くの国を見てきましたが、外から来た人にこれだけ親切な土地柄は珍しいと思います。食べ物も美味しいし、山あり、海ありと自然も豊かだし、温泉も各地にありますしね。文化的にも、古代と近代の中華的なものが背骨にありながらも、原住民や客家の文化、そして近現代の日本や西洋の文化が混ざりながら、独特の台湾文化というものを作成しているように感じます。九州より少し小さい島の中に、沢山のものが詰まっていて、想像していたよりも実に多様な土地だという印象ですね。でも、夏の蒸し暑さだけは、汗っかきの私は閉口してしまいます(笑)。

Q:台湾で感動したことがあったら、聞かせてください。

日々感動の連続です。台南で小銭が無くて、バスの運転手から乗車拒否されそうになった時、女性二人組がさっとバス代を払ってくれたり、台東で路線バスが2時間後にしか来ない、タクシーも通らないような場所で、地元のお爺さんがバイクに乗って、タクシーをつかまえてきてくれたり…。台湾の方には何度もピンチを救ってもらっています。感謝、感謝！

Q:台湾でびっくりしたことがあれば、教えてください。

自分の名前を自己紹介すると、30後半以上の方は十中八九、空手チョップをしながら「プロレスラーのジャイアント馬場の『馬場』ね!」と言われることです。自分の名前が、陳さんや林さんと同じ位(笑)、台湾ではポピュラーな姓であると共に、3,40年前に台湾の方々と同時代的に、日本の大衆文化を共有していたという感慨もあります。でも、そのおかげですぐに名前を覚えてもらえるのは幸運だと思いますね。

¹1974年から連載を開始している昭和30年代の東京を舞台とした漫画。人情味あふれるストーリー。

台湾南部の中等教育機関訪問記

中濱晴美（高雄事務所日本語専門家）

当協会が三年毎に行っている「台湾における日本語教育事情調査」の2006年度報告によれば、日本語教育を行っている中等教育機関は252箇所、学習者は58,198人、教師数は667人となっており、前回調査した2003年度に比べ、機関数、学習者数、教師数ともに増加している（表1参照）。

表1 2003年度と2006年度の中等教育機関の機関・学習者・教師数

	2003年度	2006年度
教育機関数	175	252
学習者数	36,597	58,198
教師数	522	667

現在、台湾の教育システム全体が多様化しており、それは、学習者が増加しているこれら中等教育機関においても例外ではない。今回は台湾南部にある、いずれも日本語学習者数が1,000人を超える大規模校2校を取り上げ、開講しているコースとどのような授業が行われているのか、紹介することにした。

高雄市私立樹徳高級家事商業職業学校について

同校は高雄市内にある職業高校で、「応用外語科日文組」（『応用外国語学科日本語コース』の意味、以下『日文組』）と「総合高中日語学程」（『総合学科日本語コース』の意味、以下『総合科』）で日本語教育が行われているほか、日本語非専攻学科を対象に、第二外国語としても日本語クラスが開講されている。

日文組の生徒は、読解・会話・聴解といった日本語に関する専門科目を1年生から学び、1年間に18単位の取得が義務づけられている。2年生ではコンピューターによる文書処理や作文などを履修し、3年生では「ビジネス日本語」といった、より実用的な科目が加わる。なお、現在1年生は1クラス、2年生と3年生はそれぞれ2クラスの計5クラスが開講されている。

見学した2年生クラスは、1クラス30名という中等教育機関としては恵まれた環境で日本語を学んでおり、訪問当日は「日本語能力試験」を控え、4級受験に向けての試験対策を行っていた。1年生クラスは50名という大所帯で、学習を開始して間もなかったが、ひらがな、カタカナの読み書きはもちろんのこと、簡単な会話であれば行うことができた。両クラスとも、台湾人教師が担当しており、授業は概ね中国語で進められていた。なお、同校の日本語教師は台湾人教師8名と日本人教師1名で構成されており、日本人教師は主に会話クラスを担当している。

屏東県私立屏東高級中学について

同校は台湾南部の屏東県にある高級中学である。普通高校でありながら、職業コースも開設されており、その中の専攻として、樹徳高級家事商業職業学校と同様に、「日文組」と「総合科」のそれぞれのコースで日本語教育が行われている。また、職業コースの日本語非専攻学科と普通科のクラスにおいても、2年生から第二外国語として日本語が履修できるカリキュラムを組んでいる。なお、日文組では1年生から、総合科では2年生から専門科目として日本語の学習を開始するのだが、総合科においては学習2年目の3年生であってもその実力は高く、8割以上の学生が日本語能力試験の4級に合格している。

訪問した日文組の1年生クラスでは、日本の歌（涙そうそう）を聴き、配布された日本語の歌詞と中国語の対訳歌詞の空白部分を埋めるという聴き取りのタスクに取り組んでいた。最初こそ、聴き取りに苦戦している様子であったが、繰り返し聴くうちに、ほとんどの生徒が日本語、中国語の歌詞の空白部分を埋めることができた。さらに、完成した歌詞を元に、最後はクラス全員で歌の大合唱となった。同校には台湾人教師5名と日本人教師1名が在籍している。また、校内では「日本語漢字コンテスト」「日本語カラオケコンテスト」などのイベントが行われているほか、日本への国際教育旅行も毎年実施しており、今年度は大阪への旅行が決定している。

所感

両校を訪問して驚かされたのは、生徒の日本語能力の高さである。専門に日本語を学んでいる日文組の3年生であれば、日本語能力試験の4級にほぼ合格しており、中には3級、あるいは2級にまで合格する生徒もいるとのことである。その背景には、低学年からの専門教育に加え、日本文化に対する興味の深さもあるのだろう。台湾のケーブルテレビでは、日本の人気ドラマが放映され、書店には日本の漫画や雑誌が並び、CDショップには日本の歌手のコーナーまで設けてある。それらは台湾の高校生間で非常に人気があり、彼らは、授業以外でも、日本語の世界に多く浸っているのである。しかし、そんな彼らの実力を発揮する機会が、台湾北部で開かれている「全国高校生スピーチコンテスト」などに限られているのは残念なことである。今後は、台湾南部においてもその実力が発揮できる場が設けられることを望む。

台北事務所（閲覧室）からのお知らせ

閲覧室では、これまで日本語センター収蔵図書と日台交流センター収蔵図書とを別々のシステムで管理し、貸出カードも別々にしていましたが、利用者の便を考慮して、4月から両者を統合管理することになりました。独自の分類法で管理されていた日本語センター収蔵図書は、日台交流センター収蔵図書の分類方式(日本十進分類法)に合わせて分類し直され、両者は閲覧室収蔵図書として、一つのシステムで一括管理されるようになりました(表1参照)。従って、4月以降は「日本語センター貸出カード」が使えなくなり、「日台交流センター貸出カード」のみが有効となります。今後は図書の所属先によってカードを使い分ける必要がなくなりました。現在、「日台交流センター貸出カード」をお持ちの方は、そのまま継続してご利用になれますが、「日本語センター貸出カード」しかお持ちでない方は、次回来室の際に身分証明書を提示して、新しいカードの発行を受けてください。1回の貸出が5冊までとなった他は、利用規則に変更はありません。

なお、昨年後半からは、利用者のご希望に応じて、小説類や年少者向け図書、名作映画や落語DVDなど、日本語・日本語教育関係以外の一般書籍の収蔵にも力を入れ始めております。5月初旬には新着書籍・DVD約520点を公開する予定ですが、それ以後も、できるだけ利用者の声に応えながら蔵書の充実を図っていくつもりですので、収蔵希望図書等がありましたら、閲覧室備え付けのアンケート用紙やメールなどご希望をお寄せください。
メールアドレス：nihongo@mail.japan-taipei.org.tw

表1 閲覧室収蔵図書（2008年4月1日現在）

分類項目	閲覧室収蔵数
000 総記	2,563
100 哲学	469
200 歴史	1,960
300 社会科学	3,120
400 自然科学	299
500 技術・工学	241
600 産業	246
700 芸術・美術	638
800 言語	4,300
900 文学	2,176
002 視聴覚他	2,024
合計	18,037

高雄事務所からのお知らせ

高雄事務所では、JASSO（独立行政法人学生支援機構）主催の大規模留学フェアの他、要望があれば指定の教育機関まで出向き、個別に留学説明会を行っています。説明会では、大学院進学希望者を対象とした「交流協会奨学金制度」、交換留学生を対象とした「交流協会短期留学奨学金制度」等の説明の他に、留学一般についての質問を受け付けています。これまでの説明会で、参加者から受け付けた質問は「大学院に進学したいと考えているが、学校選びの方法が分からない。」「日本の学校とのコンタクトの取り方を教えてほしい。」といった実際的なものから、台湾と日本の教育制度の相違による大学入学資格の問題、さらには生活面に関することまで、その内容も多岐に渡っています。

最近では、現在の社会状況を反映して、就職に有利な技術を取得するためのコンピュータ関係の専門学校、アニメ制作の技術を身につけるための専門学校に関する質問も多くなり、年々、日本に留学する目的が多様化していることが窺えます。

我々スタッフは日本留学を目指している学生の皆さんを応援するために、様々なニーズに応じた情報を提供していきたいと考えています。留学説明会開催に関するお問い合わせは、高雄事務所文化室までお願いします。

なお、当事務所図書室には留学に関する資料も取り揃えており、ホームページでは留学に関する情報を随時更新していますので、こちらも併せてご利用ください。

ホームページURL：<http://www.koryu.or.jp/kaohsiung/>



留学説明会の様子

目次

1～2 ページ 台湾の中学校における日本語教育

3 ページ 日本語・日本語教育のキーワード

4 ページ インタビュー

5 ページ 台湾南部の中等教育機関訪問記

6 ページ お知らせ